

「肝臓診療 A to Z 国立がんセンター東病院の診療戦略」

国立がんセンター東病院肝臓グループ 編集

京都大学教授医学研究科消化器外科学

山 岡 義 生

国立がんセンター東病院肝臓グループによる「肝臓診療 A to Z」が刊行された。本書の各頁に占める図と表のスペースはかなり多いが、それぞれの表、図が無秩序でなく意図をもって並べられていることが一瞥してわかる。それは、頭だけで考えた構成でなく、実際に診療の上で直面した問題点を研修医にわからせるためには、どのような順序で図表を使って説明するかの答えを出しているからである。外来レベルでの問題点、診断に至るまでの検査の進め方と、つい上医に聞いてしまいそうな所が、これを読んでいれば順序だっで対応できる。しかも、一番大切な“どんな所見のときに治療が必要か”まで極めて要領よくまとめられている。ここまでマスターすれば研修医合格である。

“治療法の選択”においても、各種治療法の概論と各治療法に期待できる範囲を、自分のデータを根拠に述べたあと、国立がんセンター東病院としての基準が出されている。最近、患者さんへの説明について、担当医はEBMが実行できているのか？との疑問が出されているが、まさにこの基準が施設としての良識というべきである。

最後に、カンファレンスが掲載されているが、読者はこの姿勢を良く学ぶべきである。多くの施設で、最

初の治療選択は単一の科で方針を決め実行し、その結果が、経過とともに複雑化した時点で共通のカンファレンスに出して良策を聴きたいとするものがよくみられる。ここに出されている4症例は読者に理解しやすい症例が選ばれていると考えるが、雰囲気は十分伝わっている。誰が見ても外科適応でないと言えそうなものでも“外科的なら？”といったんは振られている点に外科に対する信頼とそれぞれの科の良識を強く感じさせられる。このような病院で治療を受けられる患者さんは幸せである。

文献も過不足なくあり、根拠となるところを研修医は調べることが可能な丁寧な編集である。準備から発行までに少し時間がかかったせいか直近の文献がないのが残念である。この世界も日進月歩なのですぐに改訂の準備に着手されることをお勧めしたい。

わが国においては、将来的構想として肝臓学会を中心に、肝臓癌の撲滅運動、発癌予防対策などが着実に運動として盛り上がってきており、その成果が期待されている。しかし、日常の診療においては、現に沢山の患者さんが闘病しておられ、一線の病院では毎日が目の前の肝臓癌との戦いであるといっても過言ではない。まさに、国立がんセンター東病院もその最前線の1つであり、また、

専門家集団として認知されているだけに多くの患者さんが押しかけておられる。その中であって、肝臓グループとしてカンファレンスを重ねて一人の患者さんへの対応の仕方を決定していく仕組みを作り上げられたことに敬意を表したい。ここに至るまでに、内科、放射線科、外科の個々の努力、そしてその成果の上に立って、お互いの信頼関係を持てる状態に至るまでの基礎づくりが並大抵のものではなかったことは想像に難くない。このようにグループができてしまうと当たり前のような毎日の診療であっても、出発時は必ずしも関係が円滑に行かないものである。その時点でお互いにずいぶんと譲り合いのお気持ちがあったこと、そして、単に医師団の努力だけでなく、コ・メディカル、秘書、事務の方々の協力もあったことが推察される。

肝臓に取り組むすべての臨床医とチームに本書を推薦するとともに、このグループの更なる発展から得られたデータに基づく改訂版を期待する。

● B5 頁216 図65 写真190
カラー写真4 表13 2001 定価
(本体8,500円+税) 送料実費

医学書院 刊(☎03-3817-5657)